

二 かぐやひめ〔二年〕

昭和四十年八月一日から六日まで、六日間、島根県浜田市原井小学校において行われた教壇修養会での御教壇である。

一 教 材

秋。 竹。

切る

む

かし、「竹とりの おきな」というおじいさんが、おばあさんとふたりですんでいました。

雲一つない、秋のあります。おじいさんは、いつものように、山へ、竹を切りにいきました。

ひんやりとした竹やぶの中にはいって、おじいさんは、あたりを見まわしました。すると、ねもとの光つている竹が一本、目につきました。

おじいさんは、ふしきに思つて、その竹を切りました。



と

ころが、おどろいたことに、竹の中には、きらきら光る、小さな女の子がいました。

びっくりしたおじいさんは、その子を、そつと、てのひらにのせました。

「これは、ありがたい。」

おじいさんは、この子を、じぶんのこどもにして

そだてようと思いました。

おじいさんのうちには、こどもが、ひとりもなかつたのです。

「早くかえつて、おばあさんをよろこさせてあげよう。」

おじいさんは、その子をふところに入れて、かれりました。



ま

あ、まあ、かわいい
女の子。」

と、おばあさんも 大よろこ
びです。

おじいさんは、青竹で、き
れいな かごを あんて、女
の子を 入れました。

さびしかつた うちの 中
が、きゅうに、にぎやかに
なりました。

ふたりは、この 子を、た
いそう だいじに して そ
だてました。

それからは、おじいさんの
切る 竹の 中からは、よく、
いろいろな たからものが
でて きました。

おじいさんの うちの ら
らは、だんだん よくなっ
て いきました。



女

の子は、ぐんぐん 大
きく なって、みつき

ほど たつと、もう すっか
り、ふつうの 人の 大きさ
に なりました。

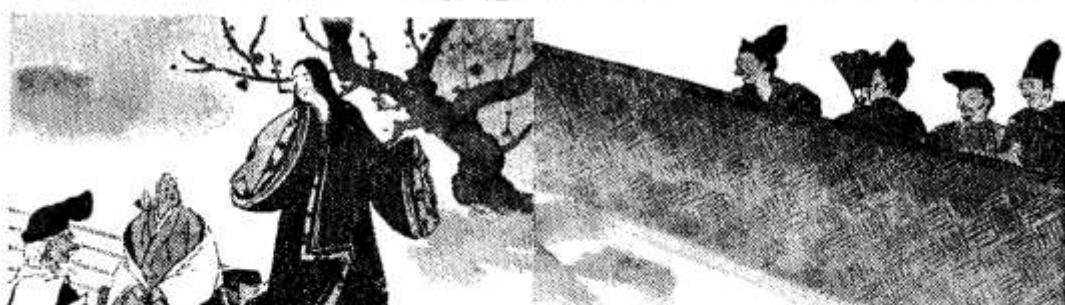
そのうえ、たいへん うつ
くしく なつて、この 子が
いると、家の すみすみまで
明るく なります。

おじいさんと おばあさん
は、この 子に、「かぐやひ
め」と いう 名をつけま
した。

「やさしくて うつくしい
かぐやひめ。」

「かしこくて 光りかがやく
かぐやひめ。」

村の 人たちが、こんな
ことを いうように なりま
した。



町。

金。

か

ぐやひめのことは、
村から町へ、町から

みやこへとつたわって、どう
うどう、みかどのお耳にまで
どどきました。

みかどは、

「そんなにやさしくてう
つくしいむすめなら、わ
たしも会ってみたいか
ら、ようすを見てくる



年。

そ

れから、またいく年
かたちました。

ある年の春のころか
らです。どうしたことか、
ぐやひめは、ときどき、月
を見ては、かなしそうな
かおをして、なにかかん
がえこむようになりました。
それに気がついたおじいさんとおばあさんは、

たいそうしんぱいして、

「どうしたのですか。そんなにかんがえこんではかりいて。」

と、かぐやひめにたずねました。

けれども、かぐやひめは、
いわれるほどのむすめではあります。
「いいえ、わたしは、そんなに
会いませんでした。

といつて、そのつかいに
会いませんでした。

「おっしゃって、つかいの
ものをおだしになりまし
た。

けれども、かぐやひめは、
いわれるほどのむす
めではありません。」

といつて、そのつかいに
会いませんでした。

ように。」

秋

になりました。

十五やが ちかづく
と、かぐやひめは、まいばん、
しくしくと なくようにな
りました。

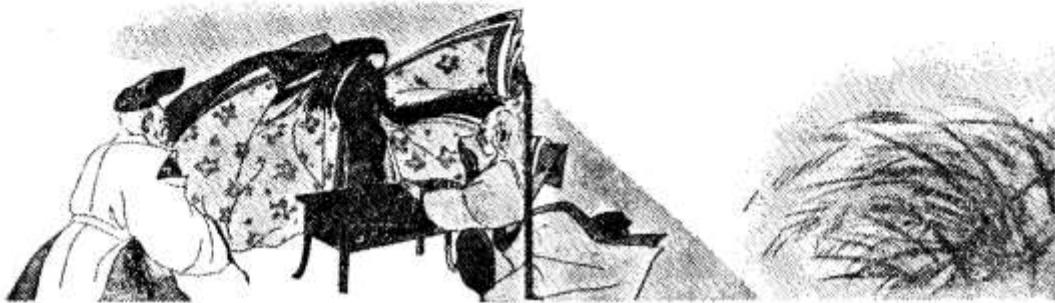
ふたりが、わけを たずね
ますと、

「わたしは、もともと、月の
国のものです。この十五
五やには、月の国から

むかえがくるので、おわかれ
しなければなりません。
それがかなしくて、ない
て いるので ございます。
と こたえました。

ふたりは、おどろいて、
「むすめを まもって くだ
さい。」

と、みかどに おねがいしま
した。



107

106

東。

よいよ、十五やにな
りました。

みかどの けらいが、たく
さん やつて きました。そ
して、ゆみやや かたなを
もつて、家の まわりを と
りかこみました。

日が くれました。
東の 山から、まるい 大
きな 月が のぼって きま
した。

した。

「どうか、いつまでも、この
家に いて ください。」

おばあさんは、かぐやひめ
を つれて、くらの 中に
かくれました。

「だいじな むすめを、わた
して なる ものか。」
おじいさんは、くらの 前
に 立ちました。





が、雲にのっておりて
きます。
家をまもつていたみ
かどのけらいたちは、月の
光で目がくらみ、どう
することもできませんでした。
くらの戸は、ひとりでに
あきました。かぐやひめは、
いつのまにか、そこにでて
いました。

月のあたりに、ぱっかりと、
白い雲がうかんだかと思
うと、どこからか、うつく
しいおんがくがきこえて
きました。

みると、金色の車をひ
いた、月の國の天人たち

がのぼるにつれて、
あたりは、ひるのよう
に明るくなりました。

月

月のいいばんには、ど
うか、わたしのことを見
いだしてください。」

かぐやひめは、月の國の
きものにきかえました。
月の光は、またいちだ
んと、明るくなりました。

月の光をあびて、かぐ
やひめは、いっそううつく
しく見えました。

かぐやひめをのせた金
色の車は、しづかに、天へ
のぼっていきました。
天人たちのおんがくも、
しだいにとおくなりまし
た。



い

いろいろおせわにな
りました。ごおんは、
けつしてわすれません。

月のいいばんには、ど
うか、わたしのことを見
いだしてください。」

かぐやひめは、月の國の
きものにきかえました。

月の光は、またいちだ
んと、明るくなりました。